

佐賀大教育 ○甲斐今日子 中村学園短大 才田眞喜代

〔目的〕乳幼児の排泄習慣には、快、不快の感情が含まれており、乳児は早くから排尿すれば不愉快な緊張が解消され、おむつが濡れているときは不快に感じ、取り替えてもらえば気持ちが良いことを感じるといわれている。しかし、紙おむつはこの濡れ感を抑える工夫が施されており、そのために布おむつに比べて排尿によるおむつ内温湿度及び着用感への影響が小さいということが、これまでの実験により明らかとなった。

そこで、さらに排尿を想定した着装実験を実施し、布おむつと紙おむつの排尿後のおむつ内温湿度及び皮膚温の変化と不快感について検討を加えることとした。

〔方法〕温度 20 ± 1 ℃、湿度 65 ± 5 %RH及び温度 30 ± 1 ℃、湿度 65 ± 5 %RHに設定した恒温恒湿室内で、成人女子3名の被験者に試料を着装させ、おむつ内温湿度、皮膚温及び着用感の経時変化を測定した。測定開始30分後に排尿として人口尿200mlを注入し、その後の変動を30秒毎に60分間記録した。着用感は温冷感、湿潤感、触感及び快適感について5分毎に被験者による評価を行なった。

〔結果〕着装実験の結果、いずれの環境条件においても排尿後のおむつ内温湿度、皮膚温及び着用感の変動に、素材による顕著な差が認められた。特に、温冷感や皮膚温の変動に差が認められたことから、濡れによるおむつ内の温度低下が不快を感じとる要因であると考えられる。